



坂本龍馬
いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

跋 山 BATSUZAN SHOSUI 渉 水

共感の輪を さらに大きく広げる

皆さま、こんにちは。
本年4月から坂本龍馬記念館の第4代目館長を拝命いたしました吉村大と申します。
拜命の直前は、高知県庁観光振興部の職員として、観光関連業界をはじめとする多くの皆様方とともに官民総ぐるみで、観光地としての磨き上げと、観光誘客に取り組んできました。
坂本龍馬先生と私の所縁をご紹介いたしますと、一つには、平成22年の大河ドラマ「龍馬伝」で、これとシンクロして開催された観光博覧会「土佐・龍馬であい博」では、観光振興部の担当課長として、現場の総括責任者の役割を担わせていただきました。
同博覧会のねらいは、ドラマと連動した企画展示を行うパビリオンを県内4か所に設けて、そこを入り口に桂浜や坂本龍馬記念館をはじめ、県内隅々の



観光地に観光客の方々を招き入れることです。およそ一年間の会期中、「龍馬のふるさと高知」のパビリオンには、90万人を超える方々がご来場くださり、観光博覧会が大いに賑わいました。
もう一つは、平成29年から2年間にわたり開催しました「志国高知 幕末維新博」です。大政奉還と明治維新から150年にあたる年を生かした観光誘客を図ろうと、グランドオープンした高知城歴史博物館と坂本龍馬記念館をメイン会場に、龍馬先生をはじめ、本県が輩出した英傑ゆかりの地の歴史文化施設を中心に、合わせて25の会場を設けました。
この歴史観光博覧会では、龍馬先生が新国家という文字をしたためた、いわゆる「新国家の手紙」を前に押し出すことにより、全国的な話題化を図ることができました。
各会場において、日本の転換点となった期に、地方にありながら日本を何とかしようとする新しい国づくりに貢献した英傑たちの足跡や息吹を体感していただけるよう、貴重な書状や古文書、武器、衣装、工芸品、古写真といった本物の歴史を通して、その土地土地の歴史の意義深さをお伝えしました。2年間の合計で、334万人を超える方々がご来場くださり、ほんとに多くの方々にと土佐の多様な歴史を深く味わっていただ

き、共感を得ることができたと思っております。両博覧会ともに、龍馬先生が助けてくださったと深く感謝しています。
当館は、本年の11月15日に開館30周年を迎えます。あらためまして、国内外の多くの皆様方に、当館の「創館」から「龍馬への入口」、そして「龍馬の殿堂」へと進化を遂げるまで、そして今もなお、多大なるお支えをいただいておりますことに、心より敬意と感謝を表させていただきますと存じます。

龍馬先生は、混迷を極めた激動の時代の大きな流れを読み取り、民主主義国家と貿易立国としての独り立ちを描き、国の未来のために、ひるむことのない行動力で奔走し、時代の転換に大きく貢献されました。この大仕事は150有余年を経た今もなお、今また数多くの課題に直面する現代社会において、私たちに深い感銘と大きな勇気を与えてくださっています。

当館ではこれからも、先生の偉大な志と歴史的役割を、偉業や功績の顕彰を通じて、次の世代、またその次の世代へと末永く受け継ぎますとともに、共感の輪をさらに大きく広げられるよう取り組みを進めてまいります。とと考えています。

私なりの等身大で、職員一同、こうした努力を一生懸命、続けてまいりますので、坂本龍馬記念館をお支えいただいております皆様方の変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

館長 吉村大(よしむらだい)

「坂本龍馬記念館の軌跡

— 出会いの奇跡をたどる — 展

会期：令和3年7月6日（火）～令和3年9月14日（火）

平成3（1991）年11月15日に開館した当館は、今年の11月15日で開館30年となる。開館以来、NHK大河ドラマ『龍馬伝』の放送や新館建設など、大きな節目の年には重要な資料が発見されてきた。それらの資料がどういう経緯で所蔵者に受け継がれ、当館への収蔵に繋がったか、当館の軌跡を振り返りながら、資料と所蔵者との奇跡的な出会いを紹介する。

当館誕生の契機は、龍馬生誕150年に当たる昭和60（1985）年の前年にさかのぼる。次の世代の人々が、龍馬について正しい理解と認識を持ち、龍馬の先見性や柔軟な発想、積極的な行動力などを受け継いでいこうと、高知商工会議所青年部、高知県商工会青年部連合会など高知県下12の青年グループが、記念事業として募金で記念館を建設することを申し合わせ「坂本龍馬生誕150年記念事業実行委員会」を結成した。完成後に高知県へ寄贈したので、「高知県立坂本龍馬記念館」として誕生した。

平成3年に建物は完成したものの、展示資料の収集はほとんど進んでおらず、そうした中、密かに資料収集のために動いてくださ

っていた方がいた。それは『坂本龍馬全集』の編集・解説をされた作家の宮地佐一郎先生だった。開館の4年前に当たる昭和62（1987）年から東京の自宅近くの古美術商に通い、いざ開館される龍馬記念館のために私費で資料収集を始めた。そして、開館時には30点、以後折りに触れて25点を寄贈してくださった。この最初の30点が無ければ、ほとんど資料が無いままでの開館となったことだろう。

こうして開館した当館は、現在1,200点を超える資料を所蔵している。龍馬の真筆書簡7点や土佐藩京都藩邸史料など貴重な資料も増えてきた。ここでは運命的な出会いを感じた2件の資料について紹介したい。

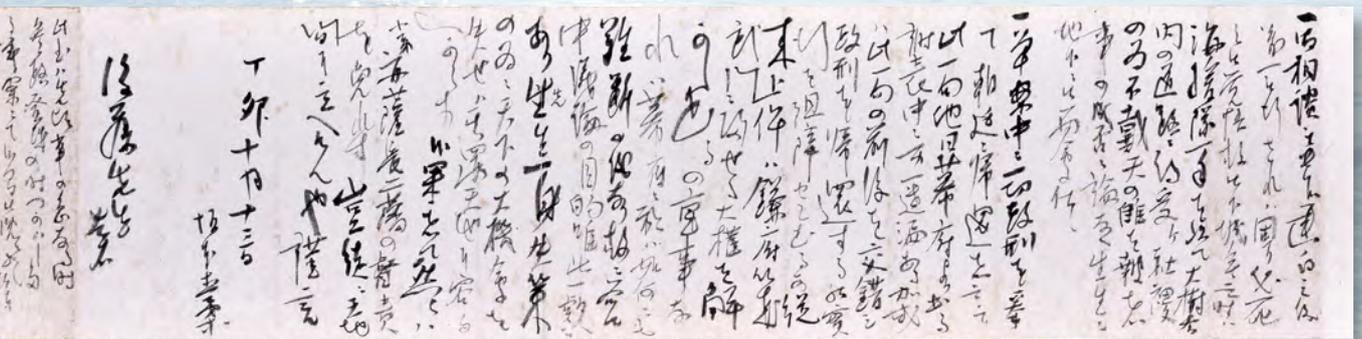
まず1件目は、平成18（2006）年の武市半平太書簡である。当館は前年8月に2代目の館長として森健志郎氏（故人）が就任していた。そして、平成18年7月からは「それぞれの幕末―龍馬・半平太―そして以蔵」展を開催する予定となっていた。開催の1ヶ月前、森館長の中学時代の友人で軟式テニスのダブルスを森館長と組んでいた方が不意に訪ねて来られ、「武市半平太の書簡を持つている」とおっしゃられた。その書簡は半平太の尊王思想を知る上で最良の書簡を含む3点で、一部の研究者しか所在を知らない貴重な資料だった。所蔵者の方は、半平太が切腹する際に介錯

を務めた小笠原保馬の家系に繋がる方だった。保馬は半平太の甥に当たる人物で、おそらく武市家から形見分けで貰った資料とのことだった。森館長も初めて知ったと驚いており、運命を感じる出会いだった。

もう1件の資料は、慶応3（1867）年10月13日後藤象二郎宛龍馬書簡の草案である。後藤に送った原本は古い文献に「中島家文書」と記載されており、海援隊士の中島信行の家が所蔵していたことは分かっていた。しかし、現代では行方不明になっており、平成16（2004）年11月に中島家ご子孫の方とご縁があり、書簡の所在を尋ねてみると、第二次世界大戦の際に資料を疎開させなかったため、おそらく蔵と共に焼失したと思う、とのことだった。完全に諦めていたが、NHK大河ドラマ『龍馬伝』が放送された平成22（2010）年7月、高知県内の方から、同じ内容の書簡を持つていると連絡があり、調査の結果、草案だと判明した。

資料との出会いは所蔵者との出会いであり、そこには様々な物語がある。通常の展示では、資料を展示し内容を解説するパネルを設置するが、本企画展では、このような所蔵者と物語を中心に据えて紹介する。

三浦夏樹



坂本龍馬書簡 慶応3（1867）年10月13日後藤象二郎宛草案

「海援隊士・高松太郎」展を終えて



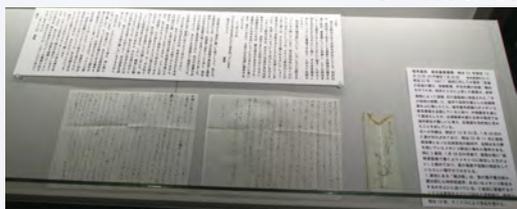
展示室風景

本展は平成29年度に寄贈された坂本直（高松太郎）資料を、展示として初めて披露するものとして企画した。坂本直資料から、太郎が受け取った書簡など17点の他、館が寄託を受けている弘松家資料から太郎の両親である順蔵と千鶴（龍馬の姉）の資料、寄託品を含め高松家の資料を多く所蔵する安田町から借用した太郎の小栗流免状など、合わせて24点を展示した。

今回の展示を通じ、改めて太郎とその周辺を見直すことで分かったことがいくつもある。たとえば、かねて疑問に思っていたことだが、順蔵がなぜ長男・二男とも坂本家へ養子に出し、弟・勇蔵を高松家の後継者としたのかについては、高知城歴史博物館の「郷士年譜」に、順蔵が天保4年（巳年であるが卯年と記しており、卯年である天保14年の誤記か）、病を理由に勇蔵を養子として届け出たことが書かれており、太郎が幼少であった早い時期に勇蔵を跡取りとし、そのまま勇蔵が跡を継いだ結果であることが分かった。この間、勇蔵は自分の跡を太郎に継がせようとしたが、既に藩外にあった太郎が「志



若き日の太郎が龍馬と同じく日根野弁治に小栗流を学んだことを示す免状（安田町教育委員会）



弟・直寛から直（太郎）への手紙（坂本直資料・当館）

がある」としてそれを断り、順蔵も息子の意思を尊重したいと勇蔵に告げていたことも判明した（「高知藩坂本龍馬家名被建下事」、国立公文書館「官符原案 辛未三秋 第二 所収」。太郎が龍馬の遺跡養子になったのも（明治4年）、二男の習吉が権平の養子になったのも（明治2年）、勇蔵が高松家を相続した明治元年より後のことだ、順蔵の息子が2人とも高松家を継がなかったのは結果的であったということになる。

また、太郎が受け取った書簡の宛先などから、長く東京に住んでいた太郎が麹町を住所とし、少なくとも明治26年頃まで麹町に住んでいた

ことも分かった（理由は不明だが時期四谷区尾張町にも居住）。これは書簡が1点2点でなく、ある程度まとまった数量で残っていたからこそ判明する事柄である。

坂本直資料において極めて特徴的である新政府の箱館時代の資料については、いまだ未解明の部分が多く残されている。目録で年未詳とした資料にも、箱館時代のものと思われる資料が散見され、今後専門的な研究者の目を通して新たな発見がなされることを期待したい。

最後となったが、展示開催にご協力くださった関係各位に心よりお礼申し上げます。

亀尾 美香



展示関連企画として5月23日（日）に実施した安田町バスツアーの様子。梅雨時にもかかわらず天候に恵まれ、高松家の墓所などを見学した。



記念館前に聖火が灯る

去る4月19日・20日、東京2020オリンピック聖火リレーが高知県でおこなわれました。高知県内の最初の区間に設定されたのが、桂浜にある坂本龍馬像前から、坂本龍馬記念館前までです。約1キロメートルを6名のランナーが駆け抜ける、時間にして15分程のリレーでした。

4月19日朝、世紀のスペシャルイベントを祝福するかのような青空のもと、高知県内での聖火リレーが始まりました。この時、第1区間の終着点である坂本龍馬記念館前には、すでに少なくない観衆が集まっていました。聖火の到着予定時刻は8時1分。分刻みのスケジュールは伝わっていましたが、肝心のランナーについての詳しい情報は誰も知りません。「あの著名人ではないか」「県を代表するあの人らしい」——直前まで様々な「怪情報」が飛び交いました。

記念館前では、観衆の動きも落ち着き、すっかり受け入れ態勢が整いました。相変わらずランナーを予想する人、ベストショットを逃すまいとカメラの

位置の調整に余念のない人、この時間もスマートフォンで動画中継を観て、現代オリンピックを堪能する人、待ち方は様々です。今か今かと待ち受けるランナーは果たして…。

観衆が視線を注ぐ先に、トーチを真っ直ぐに掲げた凛々しいフォームのランナーが姿をあらわしたのはそれから間もなくのことです。ランナーは、ランニングと言えばこの人！金哲彦さんでした。が、観衆のなかで、ランナーがこの方であることを予想していた人は一体どれほどいたでしょうか。現場には、待ちに待った聖火を迎えた高揚感のなかで、言葉ではあらわしがたい「？」と「！」が混ざり合ったような雰囲気包まれました。そして、ランナーは無事ゴールに到着。ついに記念館前に聖火が掲げられました。何より、大役を務め終えたランナーの誇らしげな表情が印象的でした。

コロナ禍の聖火リレー。当然、観衆はマスク姿ですし、密集・密接を避けることも求められます。聖火ランナーを迎える際も、あまり大きな歓声を上げることはできません。盛り上がり



という意味では、少し寂しいものがあったのも事実です。しかし、それでも、このようなまたとない機会。聖火が到着した記念館前には、自粛ムードの静けさのなかにも確かな熱気が感じられました。

当館にとっても1年越しの聖火のお迎えとなりました。1年の延期の結果、奇しくも当館の開館30周年の年にあったことに、縁を感じずにはいられません。今年度はじめてのビッグイベント。30周年を迎える記念すべき年度の早々、聖火というこの上ない特別な花を添えてくれたかのようでした。

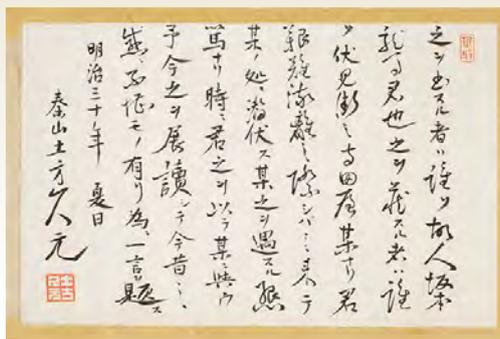
高山嘉明

龍馬の手紙

11

坂本龍馬書状巻

(京都府・京都文化博物館管理)



京都文化博物館が管理する坂本龍馬書簡は、それぞれ(一)龍馬書簡 寺田屋伊助宛 慶応3年(1867)5月中旬、(二)同 寺田屋登勢宛 慶応2年11月20日、(三)同 寺田屋登勢宛 慶応3年4月27日、(四)同 寺田屋登勢宛、慶応3年2月13日(五)同 寺田屋登勢宛 慶応3年8月5日の5通である。書簡の

宛所が示すように、これらはいずれも京都伏見の寺田屋に伝わったものだ。内容も海援隊隊長への就任・いるは丸沈没に関すること(一)、お龍の母親に対する人物評を伝えるもの(二)、お龍の妹きみえへの気遣いを伝えるもの(三)、龍馬の数々の変名を示すもの(四)、イカルス号水夫殺害事件に関すること(五)など多岐にわたり、幕末維新史を考える上で、また龍馬個人の人物史を構築する上で重要な資料といえ、有難いことにこれまで様々な展覧会や書籍で御紹介いただいている。

しかし、これら5通が実は一巻に張り継がれて伝来しており、また同巻には、田中光顕和歌、土方久元覚書、勝海舟覚書、大鳥圭介二行書、不詳二行書が取り合わされていることは意外と知られていない。これらはいずれも同時代を生きた各作者の龍馬への追慕が込められており、卷子にも「坂本龍馬君翰墨」という題箋が付されている。中でも久元覚書は年紀を有しており、本史料の成立時期を知る上で看過することはできない。明治に至り、いかなる形で龍馬像が形成され、その周囲にはどのような人々が存在したか。龍馬の表象を考える上で本巻は重要な素材ともなる。

西山剛(京都文化博物館 学芸員)

私のおすすめ

No.11

「バスにゆられて」

今回の私のおすすめは坂本龍馬記念館までのバスの旅です。

当館までバスを利用される場合はMY遊バス(観光にはこちらがおすすめです)と路線バスがあります。今回は私が通勤に利用していた路線バスでの記念館までの旅をご紹介します。

旅のはじまりは高知駅。ここから約40分の旅がはじまります。大きな荷物を持った旅行中と思われるお客様やスーツ姿の通勤のお客様を乗せてバスはゆつくり走りだします。

出発から少しして車窓から街並みを眺めると高知の観光名所はりまや橋が見えてきます。それからひたすら南進していきます。対向車がくるとひやっとするような狭い道もバスは難なく進み、やがて太平洋を見渡せる海岸線の道路、通称、桂浜花街道に出ます。

桂浜花街道の脇には総長2,700mにもなる花壇が整備されており、季節ごとのきれいな花々が観光客の方々をおもてなしし、訪れる方のこころを和ませてくれます。お天気の良い日は、目の前に広がる太平洋の海の青さとキラキラとした水面もぜひご覧ください。

海は、日々色々な表情を見せてくれますが、なぜか思い浮かべる海はいつも美しく輝いています。龍馬さんもこの海を見て大きな志を持ったのでしょうか。

バスの旅は終わりに近づきます。龍馬記念館前でバスを降ります。バス停から坂本龍馬記念館までの上り坂は、歩くと数分ですが、その坂道にも季節を感じるができます。

春は桜の花びらが舞い、初夏は新緑の香り、梅雨時期の色鮮やかな紫陽花、秋はつわぶきの花と金木犀の香り、冬は椿の花というように四季折々の花が皆様や私達を出迎えてくれます。その景色も楽しみながらご来館いただければと思います。

坂本龍馬記念館で職員一同皆様をお待ちしております。

松本友



坂本龍馬記念館に続く坂道 春

学芸員の大きな仕事のひとつとして、企画展を担当し開催するというものがある。当館では年間4本の企画展を開催するため、学芸員4人がそれぞれ1本を担当している。

本年度は記念館開館30周年にあたり、10月からは2企画をまとめて特別展『龍馬と北の大地』展を半年に亘り開催する。第1部「蝦夷地へのまなざし―龍馬と幕末の志士―」から、第2部「北海道で、龍馬“生きる”―チョッコウさん再び―」へと、幕末から現代へと連続したテーマで紹介する。

龍馬が生きていたら、という問いがよくある。その答えは分からない。龍馬は、幕末という封建社会から近代社会への転換期の舵取りをした。無論歯車のひとつではあるが、重要な歯車であったことは周知のところだろう。それにしても明治という世にどんな動きをしたのか。志半ばという言葉通り、それは誰にも分からない。

それでも、手がかりとなるのが、明治2（1869）年に北海道と命名された蝦夷地である。龍馬のまなざしが、北の大地に向けられていたことは間違いない。龍馬の活動基盤であった海援隊の規則「海援隊約規」に謳

われている、「開拓事業」の地は蝦夷、晩年には日本の島に移り、加えて貿易、北方警備・海軍演習と、射程は明確になっていた。

さて、龍馬没後30年余りを経て子孫たちは土佐から北海道に渡っていった。龍馬の志を継いでの渡道とは少し違うが、それから120年余り。今ではすっかり「道産子」となられたご子孫は多い。

龍馬の実家の後裔である農民画家・坂本直行（1906〜82）は没後40年となる。直行の描いた花の絵の包装紙で有名な北海道・帯広の菓子メーカー「六花亭」は、帯広近郊の中札内村に、かつては中札内美術村、今は六花の森で『坂本直行記念館』をはじめとする7施設において坂本直行を紹介している。広



廃線となった国鉄広尾線（1929～87年）は帯広～広尾間を結んだ。「六花亭」創業者・小田豊四郎はこの路線で広尾の原野に直行を訪ねた。JR帯広駅前にある十勝の鉄道記念レリーフ＝帯広市



直行が入植した原野の今。手に入れた25町歩は、柏と白樺のある痩せた土地だった。一家がいなくなって60年以上が経つ＝広尾郡広尾町下野塚



北海道大学構内の模範家畜房（モデルバーン／重文）。中札内美術村にあるかつての「坂本直行記念館」の建物のモデルである（現在は「北の大地美術館」）＝札幌市北区

大な10万㎡の敷地には、ハマナシ（直行同様に牧野富太郎に倣う。一般的にはハマナス）、エゾリンドウ、オオバナノエンレイソウ、カタクリ、エゾリュウキンカ、シラネアオイをはじめとする北の花々が風に揺れている。

当館では、直行生誕100年と当館開館15周年の年に、高知で初めて坂本直行を紹介した。直行は土佐を知らない。釧路に生まれ、龍馬を語らず、祖先の地高知に来たことはない。それにしても、多くの友と交わり、孤高の農民として十勝原野開拓に従事した生き様に龍馬を重ねることは難くない。

生まれた時から坂本家の婿養子である父・弥太郎から龍馬の話聞き、家には龍馬遺品が大切に保管されていた環境は、直行にとって「漬物石のように重い」存在であったようだ。裕福な名士の家に生まれた直行が、

昭和初期に身一つで原野へ飛び出したのは、日高山脈の美しさに魅了されたからだというが、その現実は想像を超えて厳しいものだった。

一人、原野に挑む直行を支えたのは家族である。脱藩後の龍馬を支えたのも家族であった。もし、龍馬が生き長らえて、蝦夷の地を踏むことがあったとして、開拓事業の厳しさは今の北海道からは想像できないだろう。

一農民として、貧乏と闘った原野生活だったからこそ、そこでスケッチした直行の描く花々や山の絵にはその魂が宿り、今なお人々を惹きつける。

私は当館職員となつてすぐの頃、事務室の反故の中にあつた坂本直行の紹介記事を見つけた。以来、直行さんに魅了された一人として、16年余り北海道に通った。海山を超え、ゆったりとした北の大地に機体が降

り立つとき、「ああ、帰って来た」というような思いになるのは、幾度となくその風景を見て来たからである。

北海道は当初、私にとって未知の土地であった。それでも直行さんをキーパーソンにして、小さな点を集めながら、線から面へと少しずつ情報や交流を広げてきた。そうした歲月の中で重要な龍馬資料と出会い、故郷の地にある当館に佩刀や書簡など龍馬遺品が収まった。広い大地に点々とある懐かしい顔。坂本家をはじめとする個人の方々や各市町村の方たちが、私の未熟な学芸員生活を応援してきてくれた。

北の大地にある大きなドラマの一片を、県民をはじめとする皆様に、秋以降ご紹介したいと思っている。15年前から消えない「チョッコウさんを再び…」という声に応えるためにも。



令和3年度

連続講演会

「龍馬を考える」

5つの視座

毎年、好評をいただいております「連続講演会」。開館30周年記念として原点復帰、「龍馬を考える5つの視座」と題してお送りします。

当館が開館して30年、その間に、様々な分野で新しい発見や学説が発表されています。それは、歴史学も例外でなく、龍馬や幕末に関しても、新しい資料の発見や調査、研究がなされ、今まで「定説」とされてきたことの見直しも進みつつあります。今年の連続講演会「龍馬を考える5つの視座」では、そうした30年の間の、新しい視点や研究成果から龍馬を見つめなおします。

各回の講師と内容は次のとおりです。

(各講師からのメッセージを基にしています。)

令和3年度連続講演会
「龍馬を考える」
5つの視座

6月12日(土)	木戸と大久保の呉越同舟 一薩長同盟からの帰り道	青山 忠正氏
8月28日(土)	薩摩藩と坂本龍馬	町田 明広
10月23日(土)	龍馬の時代の人口と家族	黒須 里美
12月11日(土)	龍馬暗殺はなぜ起こったか 一近江屋事件の政治力学	桐野 作人
令和4年2月26日(土)	坂本龍馬伝の成立 一坂崎紫瀾と「船中八策」を中心に	知野 文哉

高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール
開演 13:30～15:30(開演前30分受付)
観覧料 一般(高校生以上) 500円(中学生以下) 300円
会場 高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール
〒780-8555 高知県高知市東山1-1-1
TEL: 087-821-4000 FAX: 087-821-4002
E-mail: ryumaba@ryumaba.or.jp

第1回 6月12日(土)

「木戸と大久保の呉越同舟

―薩長同盟からの帰り道―

青山 忠正氏(佛教大学名誉教授)

龍馬がその成立に大きな尽力をした薩長同盟。その交渉の帰り道、同じ宿、薩摩行の同じ船で顔をあわせた木戸孝允と大久保利通は、何を話しあったのでしょうか。今までの視点で「薩長同盟」を見てみます。

第2回 8月28日(土)

「薩摩藩と坂本龍馬」

町田 明広(神戸外国語大学外国語学部准教授)

脱藩後の龍馬の動きを確認し、「脱藩後に薩摩藩士となっていた可能性」(チラシより引用)や「土佐藩に復籍を果たせなかった経緯」(同)を考えます。また、幕末における龍馬の活動の重要性も改めて考えていきます。

第3回 10月23日(土)

「龍馬の時代の人口と家族」

黒須 里美(麗澤大学国際学部教授)

龍馬が「結婚」したのは32歳のとき、京都にいた時でした。では、当時の「結婚制度」とはどのようなものだったのでしょうか。歴史人口学という研究方法で、龍馬の時代のライフコースに迫り、現代の視点で考えがちな龍馬の「結婚」や「家族」を考えます。

第4回 12月11日(土)

「龍馬暗殺はなぜ起こったか

―近江屋事件の政治力学―

桐野 作人(歴史作家・武蔵野大学教授)

政治経済研究所客員研究員

実行犯は誰か、黒幕は誰か、と「龍馬暗殺」は、今も多くの人が感心を持つテーマです。今回は、事件が起きた慶応3年に注目し、「通説とは異なる政治的な文脈で読み解く」(チラシより引用) いてみます。また、一緒に暗殺された慎太郎の立場や龍馬との関係も考えます。

第5回 令和4年2月26日(土)

「坂本龍馬伝の成立

―坂崎紫瀾と「船中八策」を中心に―

知野 文哉(歴史研究者)

坂本龍馬は様々な形でイメージが作られ、伝わってきています。その最初が坂崎紫瀾によるもので、その後明治国家の生みの親として語られ、やがて「船中八策」という伝説が生まれます。今、我々が思い浮かべる龍馬の「イメージ」の成立を「船中八策」とキーワードに考えます。(なお、第5回のみ、講師の講演の他、当館三浦夏樹学芸員との対談を行います。)

なお、全5回ともに既に定員に達しておりますが、講演会終了後1、2週間後より期間限定で録画をYouTubeで配信する予定です。「満席だった」「高知まで遠くへ行けない」という方、ぜひオンラインでお楽しみください。
また、講演録も令和4年度に発行する予定(有料販売)ですので、こちらもお楽しみに！
(いずれも実施の際は、当館ホームページでお知らせをいたします。)

河村章代

職員紹介

「龍馬が抱いた志」

西川 知佐



高知県の歴史を語る際には、決して欠かす事のできない坂本龍馬。

これまで県外から来た友人と共に足を運ぶ機会は何度か有りましたが、改めて深くその人柄や偉業を知る機会を得、日々勉強の毎日です。

今年11月15日には創立30周年を迎える本館もさることながら、平成30年開館の新館も、早3年余りが経ち多くの方にお越し頂いております。

今世紀始まって以来の厳しい社会情勢の中、ご来館下さる皆様への感謝の気持ちと共に、この記念の年より勤務させて頂くご縁を感じ、龍馬が抱いた志の素晴らしさを、日本は元より世界に向けて発信できるお手伝いが少しでも出来ればと思っております。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

■ 開館30周年記念事業スタート

“海に見える・ぎやうらい”では開館30周年事業の最初として、4月29日から「ドラマで龍馬を演じた人々」を開催しています(9月14日まで)。今回は、本展示の主な担当をした河村から見どころなどを紹介いたします。



今年は当館が開館して30年になります。この30年の間に、テレビドラマや映画、舞台などで、多くの俳優の方が「坂本龍馬」を演じています。今回の展示では、それらの中から、特に、NHKの大河ドラマで龍馬を演じた俳優5人を、番組内のスチール写真と現在のアーティスト写真でご紹介しています。

1991年から2020年までに放送された大河ドラマのうち、幕末をテーマにしたドラマは、実は7本あります。1998年の「徳川慶喜」、2004年「新選組!」、2008年「篤姫」、2010年「龍馬伝」、2013年「八重の桜」、2015年「花燃ゆ」、そして2018年「西郷どん」です。

「あれ?俳優5人って書いてなかった?」と思われる方もいるかもしれませんね。実は、7本のうち2本、「徳川慶喜」と「八重の桜」には龍馬は登場しません。(「八重の桜」では後ろ姿で登場しますが「坂本龍馬」とは紹介されていないのです…。)今回は、この2本以外で龍馬を演じたみなさん(リスト参照)を、カッコイイ写真で紹介しています。

パネルの他、「新選組!」で龍馬を演じた江口洋介さんが実際に着用した衣装(高知市立龍馬の生まれたまち記念館所蔵)や「龍馬伝」で岩崎弥太郎を演じられた香川照之さんのサイン色紙(安芸市立歴史民俗資料館所蔵)なども展示していますので、ご覧になったことのあるドラマを思い出しながら、お楽しみください。

★昭和初期から現在まで龍馬を演じた方の一覧を展示しています。みなさまがご存じの「龍馬を演じた人々」の情報をぜひお寄せください!展示情報を更新していきます!

放送年	番組名	龍馬役俳優(敬称略)
平成16(2004)年	新選組!	江口洋介
平成20(2008)年	篤姫	玉木 宏
平成22(2010)年	龍馬伝	福山雅治
平成27(2015)年	花燃ゆ	伊原剛志
平成30(2018)年	西郷どん	小栗 旬



今後“海に見える・ぎやうらい”では、特別展「龍馬と北の大地」展において、新館の企画展示と合わせた松浦武二郎と坂本直行関連の展示や、開館から30年の間に起きた10の重大なニュースを振り返る展示を開催する予定ですので、ご期待ください。

河村章代(青字部分)・中村昌代

入館状況

2021年6月20日現在

(1991年11月15日開館以来 29年217日)

◆入館者数 4,367,569人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 430,764人

編集後記

例年になく早い梅雨入りを迎えたこの夏、コロナ終息の兆しは見えません。いつもたくさんのお客様を迎えている当館でも、入館者数は激減、月単位の集計で開館以来最少を記録し続けています。

他方、当館は吉村新館長を迎え、新たなスタートを切りました。まずは秋の開館30周年記念行事、さらに31年目以降を見据え、前進(漸進)を続けてまいります(か)。

館だより“飛騰”第118号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

発行日 2021(令和3)年7月1日
 発行 公益財団法人高知県文化財団
 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830
 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015
<http://www.ryoma-kinenkan.jp>
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休
 入館料 一般500円(企画展開催時700円)
 高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。
 〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで

私のテーマ

北海道開拓に 夢かけた土佐の先人たち



椿原 庸夫

はじめに

「龍馬の夢―北海道開拓」は叶わなかったが、後に北海道開拓判官・初代北海道庁長官の岩村通俊、龍馬の甥・坂本直寛、直寛の自由民権運動の同志・武市安哉など、多くの土佐人が北海道の礎を築いた。移住者は5,813戸（明治14年～昭和10年）、屯田兵（平時は農業、戦時は軍隊）として3,642戸（明治24年～32年）が参加した。北海道は今、「日本の食料基地」「国際的な観光地」として花開いているが、その視点から、土佐の先人たちの取り上げたい。

土佐ボーイ

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」の名言を残したクラーク博士は、札幌農学校（北大の前身）の教頭として人材養成に当たったが、クラークが「土佐ボーイ」と呼び、その素朴な気質を愛した一期生3人がいた。



（北海道大学附属図書館所蔵）

札幌に於けるクラーク先生

黒岩四方之進

クラークは、「自然を科学的に観察すること」を重視した。明治10年（1877）1月30日、極寒の中、一期生16人が札幌の手稲山登山を実施。巨木の珍しいコケを採取するため、クラークが背の高い黒岩を指名。長靴を脱いで恩師の背に乗りうるとすると、そのままで良いと。

クラークの寛容な心に胸打られた黒岩は、後にクラークが「イエスを信ずる者の誓約」を起草し、生徒に署名を求めた際、一番に署名した。卒業後、日高国新冠御料牧場長として20数年間勤め、畜産界に大きな足跡を残した。退官後、十勝国直別に一大農場を開き、「直別の聖人」と慕われた。

内田瀨

内田は一期生の中でも、特に北海道の開拓行政と北海道農業確立のために献身的な生涯を送った代表者と言われる。卒業後、殖民地選定主任として、開拓の基本となる土地選定、区画割を成し遂げた。また、牛・綿羊の飼育を推進するなど混同農業を実践し、今日の「米どころ上川穀倉地帯」の基盤を築いた。遺言により遺骨は鷹栖町に埋められ、お墓もあり。クラークの帰国後も文通しており、その私信が残されている。

田内捨六

農学校時代、夏休みの40日間、内田らと石狩川探検の資源の調査へ。明治14年、開拓使の調査官として内田らと90日間の東北北海道調査を行い、翌年には人跡未踏の十勝平野に入り、入植したばかりの依田勉三（十勝開拓の父）らへ助言を与えた。九州天草から200戸の移民を計画したりしたが、志半ばで倒れた。



1978年7月30日撮影 左から、内田瀨、黒岩四方之助、田内捨六（北海道立総合博物館所蔵）

札幌農学校時代、調査旅行姿の「土佐ボーイ」たち。

高知の「よさこい祭り」に感動した北大の学生が発案した「YOSAKOIソーラン祭り」。今や国内外、約270チーム27,000人が参加し、200万人以上の観客が札幌に集う一大イベントだ。姉妹都市・友好都市、姉妹町が7つあり、固い絆で結ばれている。

〈漁業〉 広井勇

札幌農学校2期生で、クラーク精神を受け継ぐ近代築港学、橋梁学の祖。後に、札幌農学校教授を経て東京帝国大学教授。北海道庁技師を兼ね、今は一大観光地として知られる小樽運河をはじめ、函館、室蘭、釧路など各港の基盤を築いた。小樽の公園には銅像がある。

〈農業〉 川田竜吉・男爵

実業家であった川田は、1906年、函館ドッグ再建のため専務取締役に就任。同年、七飯町の農地を購入し、イギリスから数種類輸入した馬鈴薯の中からアイリッシュ・コブラーを「男爵いも」として栽培した。現在、じゃがいも生産の8割は北海道だが、作付面積が最も多い品種は「男爵いも」だ。

〈観光〉 大町桂月

文人・桂月の「富士山に登って、山岳の高さを語れ。大雪山に登って、山岳の大きさを語れ」と言う言葉は有名。1923年、桂月の紀行文「層雲峡より大雪山」が中央公論で発表され、大雪山が一躍有名になった。道内各地に記念碑・歌碑があり、北海道観光における桂月の功績は大きい。

土佐と北海道の固い絆、さらには

高知の「よさこい祭り」に感動した北大の学生が発案した「YOSAKOIソーラン祭り」。今や国内外、約270チーム27,000人が参加し、200万人以上の観客が札幌に集う一大イベントだ。姉妹都市・友好都市、姉妹町が7つあり、固い絆で結ばれている。

結び

50年前、「北海道開拓100年事業」の「アメリカ大陸横断の旅」（35日間）に参加し、クラーク博士のお墓に献花礼拝してきたが、北海道開拓に夢かけた土佐の先人たちははじめ、全ての人たちに「屯田兵3世」の一人として、心から感謝の意を表したい。

◎参考文献 札幌農学校図書出版社、WS・クラーク（北海道大学出版会）、土佐史談191号（土佐史談会）

「龍馬の思想と行動」

テーマ

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は5月22日、坂本龍馬記念館ホールにおいて第13回総会・研究発表会を開催した。

昨年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止を余儀なくされたが、今年も引き続きその影響を受けながらも、規模を縮小し、大きく形を変えることにより開催の運びとなった。高知県教育長伊藤博明様・高知市教育長山本正篤様から祝辞をいただいたが、来賓としての来場は叶わず、書面での披露となった。総会における審議については昨年度の第12回に引き続き書面議決とし、その結果が会場において報告された。昨年中止となった研究発表会は予定通り5名の講演・発表がおこなわれたが、県内在住の1名を除き、オンラインでの講演・発表となった。内容については、以下に概要を示すとともに、後日発行の『論集』にも当日の講演・発表内容を元にした論考を掲載する予定である。

例年と同じ会場を設けながら、ほとんどがスクリーン越しという特殊な開催形態となった。学会運営の新たな可能性を感じつつ、来年は通常開催できることを期待しての「宣言」の発表となった。

宣言

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、平成二十一年四月の発足から十一年が経過した。昨年は涙をのんで中止となったが、今年はコロナ禍にも負けず、リモート発表という方式も含めて開催の道を選んだ。第十三回研究発表会である。テーマは「龍馬の思想と行動」。社会のさまざまな場面で閉塞感が漂う中、龍馬とその時代に学び、人と人とのつながりの大切さを考えようとしたものだ。

講演は日本芸術文化振興会監事の白石学さん。演題は「坂本龍馬の現代的意義」。他に県内外の四人の研究者が日頃の研鑽に基づいた発表を行い、私たちは多くのことを学んだ。

坂本龍馬記念館の充実とともに、県下幸甚所で龍馬の姿が見られるようになってきた。子どもたちにとれぐれい龍馬のことが正しく届いているのだろうか。龍馬が逝って二五四年、塵世置県から一五〇年、私たちは龍馬らが生きた激動と変革の時代に学びつつ、子どもたちにも龍馬の生き方を語りながら、悔いのない道を確実に歩んでいきたいと思う。

二〇二二年五月二十二日
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会



坂本龍馬の現代的意義 —モデル喪失と創出の時代を迎えて—

特別講演

※オンライン



日本芸術文化振興会監事
東京学芸大学名誉教授

大石 学

大河ドラマ「龍馬伝」をはじめ、幕末期の歴史を扱った映像作品の多くに、時代考証の立場で関わってきた経験から、龍馬の思想と行動の現代的意義を論じた。

最大の意義は、龍馬のキャラクターの魅力、特に人生を通じた思想的成長が見られる点である。千頭清臣『坂本龍馬』にある「長刀から短刀へ、刀からピストルへ、ピストルから万国公法へ」のエピソードはフィクションだが、その二部は龍馬の書状の内容に基づいており、龍馬の視野・立場、そして価値観の広がりを見ることができる。龍馬の成長過程は、まず「土佐人」としてペリー来航に遭遇するなど「草莽の士」の一人として始まり、次に久坂玄圃・勝海舟等との出会いを経て「日本人」としての活動に従事するなかで反幕府勢力の結集に役割を果たし、また亀山社中・海援

隊での活動を通じて「国際人」としての片鱗を見せた。

海援隊約規にも、龍馬の独自性が垣間見える。約規には、自由意志による参加、組織概要と藩支援の安定性、組織統治（コーポレイトガバナンス）、遵法（コンプライアンス）、組織内教育、ベンチャープランの奨励、が謳われており、これは近代企業精神に通じる先駆的な内容である。これと比較して同時代の他の組織の綱領・規約をみれば、土佐勤王党「盟約文」は理念的・抽象的、新選組「局中法度」は理念的・精神的で、海援隊約規との差は大きい。高杉晋作による「奇兵隊結成綱領」は平等主義や業績主義など先進性も見られるが、あくまで非常時における軍事組織の規律である。

グローバル化や新型コロナウイルスのパンデミック拡大が進むなか、自国優先主義や地域間格差・対立が顕在化する今日、坂本龍馬の思想と行動の検討は重要性を増している。exclusion（排除による均質化）ではなく、and、inclusion（包摂による多様化）の精神とともに、龍馬に典型される日本型・江戸型モデルを再認識し、それを世界未来へ発信することの意義が問われている。

海南政典の「藩政機構」改革と石尾芳久氏のウェーバー「官僚制論」に依拠した分析



※オンライン

鹿児島県立短期大学
名誉教授（吉田本家末裔）

網屋 喜行

土佐法制史における重要法典のひとつに数えられる海南政典について、海南政典研究の第一人者である石尾芳久氏の研究における分析手法を紹介する形で、その内容と意義を論じた。

海南政典は、山内容堂の意をうけて吉田東洋が編纂した法規で、文久元（1861）年に脱稿、翌年「職守」篇が実施された。吉田東洋の目的は、海南政典によって「藩政機構」を「合理的官僚制」化することで、その官僚制改革の柱は、第一が人材抜擢の制度化、第二が近習・外官の兼任の禁止（藩政と家政の分離）であった。

石尾氏の研究の特徴は、海南政典が官僚の「近習・外官」峻別制をとった点を重視したことである。そして、その意義をウェーバー著「官僚制論」の論理を用いて明らかにしたことに独自性が認められる。

コロナ技術で龍馬の手紙を複製する ～100年以上前から続く古い写真印刷技術の話～



※オンライン

株式会社便利堂
コロナタイプ研究所所長

山本 修

入社以来40年携わってきた自身の経験に基づき、コロナタイプという印刷技術の特徴と意義を論じた。

ゼラチンを版に用いるコロナタイプの特性として、本来モノクロ写真の印刷技術であること、印刷物の拡大表示に強みを持つこと、耐久性に優れること、大量印刷に向かないこと、手間とコストが掛かることなどがあげられ、メリット・デメリットはつきりしている。現代においては、カラー化を実現したことで、文化財の複製や復元にその特性が活かされている。

印刷までの具体的な過程を、昨年度高知県立坂本龍馬記念館に納品した龍馬書簡の複製製作を事例として、映像にまとめて提示した。撮影・製版・校正・印刷という一連の工程に、職人の熟練の技術が生かされていることを紹介した。

明智光秀と龍馬



※オンライン

国立大学法人愛媛大学
社会連携推進機構教授

坂本世津夫

明智光秀に「謀反人」というレッテルが貼られたためか、明智光秀と土佐との関係が論じられる機会は少ない。この課題を解消する一助とするため、時代を超えた繋がりがあると考える明智光秀と坂本龍馬との関係について、私見を述べた。

かつて坂本城があった地（高知県南国市亀岩）には、近年の墓石ではあるが、坂本家の先祖が明智左馬之助（光春）である旨が書かれた墓もある。坂本龍馬の先祖にあたる坂本太郎五郎の墓は、亀岩の隣の谷である才谷にある。研究方法として仮説を立てることの重要性を指摘し、このような口伝や伝承等を根拠に、坂本太郎五郎は明智光秀の実子ではないか、等の新たな仮説を提示した。

『新葉和歌集』を手がかりに龍馬の思想と歌心を考える —龍馬の精神風土と皇国への思い



高知県立坂本龍馬記念館
学芸課長

前田由紀枝

坂本家に根付いた歌詠みの風土を紹介し、それが龍馬に与えた影響を考察した。

坂本家には、龍馬の曾祖父である井上好春から続いた歌人としての系譜があり、生真面目な歌風としてそれは龍馬にも受け継がれた。龍馬の書簡からは、龍馬に和歌を含む古典についての浅くない知識があったこと、また花鳥風月に人一倍の関心があったことが読み取れる。

これをふまえ、南北朝時代の南朝の人物の歌を集めた『新葉和歌集』が注目される。龍馬がそれを南朝へ思いを致すための座右の書と位置づけようとしていたこと、幕末の志士を鼓舞する目的で『新葉和歌集』を復刻出版した松浦武四郎との「皇国」観を介した繋がりがうかがえること等、龍馬の「志」を分析するために重視すべき要素である。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

第13回総会書面議決のご報告

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、2021年度の事業計画や予算等の総会審議事項については、事前に書面議決を行いました。その結果は次の通りです。

会員数 1200名

第1号議案（1）（2）（3）

承認67名 不承認0名 回答なし53名

第2号議案（1）（2）

承認67名 不承認0名 回答なし53名

第3号議案

承認67名 不承認0名 回答なし53名

以上により規約第9条（議決）に基づき、すべての議案について、過半数の承認をもって可決されましたことをご報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
会長 宮 英司

ええじゃないか!

宮川 禎一

最近、書店で『新・もう一度読む山川の日本史』を手にとって、幕末史のあたりをパラパラ見ていたら京都国立博物館所蔵の『近世珍話』というマインナーな絵巻の中の「ええじゃないか」の図が掲載されていて驚いた。筆者がよく龍馬展で展示してきたので図録にも掲載したのだが、高校の歴史教科書に採用されていたとは……。調べてみると、以前は江戸時代後期の錦絵にある伊勢御蔭参りの狂乱の様子を揚げていたのだが、近年になって、慶応三年に京都でええじゃないかを実際に目撃した絵師の前川五嶺が「実景として描いたこの図」に替わったのだ。

二十年ほど前までは収蔵庫の中では眠っていた絵巻を掘り出して展示紹介した筆者なので、日本史の教科書に載るなんて「出世したなあ」との感慨が深い。考えてみるとなぜ教科書にこれが載っているのか。もっと違う場面でもいいはずだ。例えば二条城での大政奉還の場面とかの方が筆者には重要だと思いが、載っていない(明治以降の歴史画しかないからか)。

時混乱におとしられた」とある。

息詰まる封建社会への鬱屈を集団乱舞で晴らすとする民衆の姿こそが「より正しい歴史だ」という歴史観が教科書に採用された根本にあるだろう。歴史を龍馬のような個人に焦点をあてて記載するのではなく、百姓・探・ええじゃないか・米騒動・安保闘争など民衆運動を重視して書くべきだとの思想だ。その中でも教科書に載せるのに適当なのがこの「ええじゃないか」だ。逮捕者などが出なかった歴史事象だからだ。集団乱舞で時代の「新」を求めた民衆の姿という評価であらう。

高校時代に「山川の日本史」で学んできた者が教科書制作の裏側を想像するなんて。それもまた感慨が深い。



前川五嶺筆「ええじゃないか図」部分 (『近世珍話』慶応三年 京都国立博物館蔵)

“話してみるかよ”

龍馬の許婚「狂人」 千葉佐那(2)

石川 明美 (山梨龍馬会甲斐援隊 会長)

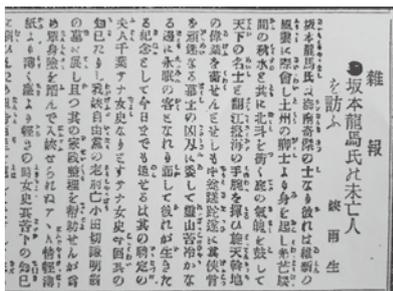
千葉さな子に「おまえは狂人だ」と言ったのは父定吉です。さな子のイメージからは程遠い言葉です。

明治26(1893)年8月、山梨県甲府市の小田切謙明宅にさな子が滞在した時、山梨日日新聞記者・山本節のインタビューを受けました。同月22日付の記事「坂本龍馬氏の未亡人を訪う」の中で3度にわたり、さな子は自らを「狂人」と語っています。

記事によると、父千葉定吉がさな子に嫁ぐか別家して夫を迎えることを勧めたものの、時代は乱れ、英傑は剣を持って立ち、国のため血を流そうと構えています。さな子も身を持って国に尽くそうと思っており、結婚など考えていませんでした。そのため、定吉は「おまえは狂人だ」と大声で言うようになったということです。

本文を要約すると、『坂本龍馬氏が、彼女(さな子)の父君に妻にしたいと求めた。父君は「家の娘は狂人なのを良く知っているはずだ。だがあなたが狂人を嫁にする気があるなら拒むことはない」として、さな子にそのことを話した。彼女に強いたわけではない。彼女は父君の命に従い、「天下が鎮まるのを待って結婚式を挙げたい」と言った。父君も坂本氏も「それでよい」と言うことになった。彼女(の年)は21か2』。

坂本龍馬、千葉定吉、さな子の声が聞こえてきそうな記事です。狂人・狂った人は言い過ぎですが、動じない人だったと感ずります。今、千葉さな子は山梨県甲府市朝日町「清運寺」小田切家の墓地に眠っています。



千葉さな子のインタビュー記事 明治26年8月22日付 山梨日日新聞

コラム・龍馬のこと

四万十で、龍馬のごとく

山本 紀子 (『無手無冠』酒造・取締役)

「走れ、走れ、龍馬のごとく駆け抜けよ!」

同志社大学アメリカンフットボール部の同輩が贈ってくれた御養子さま(夫)へのメッセージ。

山本家三代女系家族の蔵元に婿入りした中村彰宏さま。酒が飲めるぞ、酒が飲めるぞ、酒が飲めるぞ。五十四年前お見合い結婚。酒が好きだったばかりに斜陽産業の蔵元の跡継ぎに……

「オンシャ(お前)は関係ない。おら酒に惚れたがよ」。

4年前に旅立つまで愛の囁き一切なし。四万十の『ダバダ火振』栗焼酎を世に出し、百年ぶりに男子四人の子孫を残し山本家を守った。

龍馬さん。京都の最期のお酒はどんな味?

龍馬は軍鶏鍋、愛しの夫は鯨肉好き。

「オンシャーばあ酔うたんぼ(酔っ払い)に

寛大なおなご(女)はおらざった」と言うた。

愛すべき酔っ払い様と一度、泥酔してみたかった。

四万十の龍馬、男の中の男。

わが人生薔薇色じゃった。



生涯酒を愛した山本彰宏

